

「KINGCA WEEK 2022 および Master class に参加して」

国立がん研究センター中央病院 胃外科 西野将司

日本胃癌学会の会員の皆様、はじめまして。卒後 7 年目で国立がん研究センター中央病院の胃外科の西野将司と申します。平成 28 年の滋賀医科大学卒業後、東京の武蔵野赤十字病院で初期研修および後期研修を受け 2022 年 4 月より当科のレジデントとして日々研鑽を積んでおります。後期研修修了までは日々の臨床の多忙さを言い訳に、恥ずかしながら学術活動の優先順位は決して高くなく、邦文の論文を数本書いたことがある程度でした。英文での論文の執筆はもちろん、海外での発表もしたことはありませんでした。当科で働き始めると、英語で自身の臨床研究や経験を表明、対外的に発信することがいかに重要であることかを日々痛感しておりました。

5 月の中旬、ゴールデンウィークも終わり、少し当科にも慣れてきたところで胃癌学会より KINGCA WEEK の助成金に関するメールをいただきました。添付されている資料は私にとっては非常に魅力的でした。KLASS シリーズをはじめとする質の高い臨床研究で胃癌治療において世界から高い注目を浴びている韓国での学会参加は自身の糧になると違いないと確信しました。また学会に先立ち開催される Master class では韓国の top surgeon の手術を学べるチャンスもあると思いました。一方で小生のような若輩者がこの学会および施設見学に行くに資するかも疑問でした。このような葛藤を抱えつつ、当科のがん専門修練医の先輩医師と話しているのを当科の科長の吉川先生がお聞きになり「興味があるなら是非演題を出してみたらどうか」と後押ししていただき、deadline 間近でしたが演題登録をするに至りました。

発表しました演題は、「Possible candidate of splenic hilar nodal dissection among upper advanced gastric cancer not invading the greater curvature (UGC-nGC)」です。本邦の JCOG0110 の結果から非大弯の上部進行胃癌では脾摘をしない胃全摘が推奨されていますが、少ないながらも 2.4%には#10 の転移を認めています。#10 に転移があっても、郭清することで長期生存している症例もおります。そこで、これらの腫瘍の中で#10 に転移しやすいリスク因子があるかどうかを検討しました。ロジスティック回帰分析の結果、腫瘍の主座が後壁で、組織型が未分化であることがリスク因子となりました。これらの両者を満たす場合に#10 の転移は 14.9%にも見られ、郭清効果インデックスは 6.38 でした。インデックスは所属リンパ節の中では 8 番目に高く、2nd tier の中では 2 番目という結果でした。後壁かつ未分化の腫瘍では上部胃癌であっても#10 の郭清が正当化されうる、という内容の発表です。

幸運なことに演題も口演のセッションに選んでいただき、学会発表および渡航の準備を開始しました。COVID-19 の影響もあり想定はしていたものの VISA 取得にかなり難航し、渡航できないかと思いましたがどうにか必要な手続きを済ませ、渡航前の PCR 検査も無事 clear し、韓国に渡航しました。私が Master class でマッチした施設は Seoul National University Hospital であり世界的にも権威のある Han-Kwang Yang 医師が主任教授を務められ、年間 1000 件前後の胃切除を施行しております。8 月 30 日および 31 日の二日にわたり施設見学をさせていただきました。見学した手術の line up は一日目が LDG D1+および LDG D2 でいずれも Han-Kwang Yang 教授が執刀でした。並

列で別の LDG も施行されておりました。二日目が RPPG を Han-Kwang Yang 教授が執刀されその縦で Do Joong Park 教授が RDG D1+を執刀されておりそれらの手術を見学しました。第一に本邦と韓国の胃切除に関してはいくつも異なる点がありました。本邦ではいわゆる神経外側の層での剥離に基づくリンパ節郭清が標準術式ですが、韓国では必ずしもそうとは限らず、執刀医に委ねられている印象でした。教授によって手術のコンセプトは千差万別で、膈上縁の神経を温存するかしないか、Billroth-I 法での再建が好きな教授もいれば Billroth-II 法も良いと考える教授もいらっしゃる。ブラウン吻合を置くか置かないかも全ては執刀医に委ねられているとのことでした。第二に胃癌手術の施設集約化が進んでいることの影響です。韓国ではすでに施設集約がかなり進んでおり、一般の市中病院で胃癌手術が行われることは稀であると聞きました。Seoul National University Hospital のレジデントおよびフェローは日本が韓国ほどは施設集約が進んでおらず比較的若手医師でも胃切除をするチャンスがある状況を非常に羨ましがっておられました。第三に Seoul National University Hospital の皆様の人としての温かさに触れました。Seoul National University Hospital では世界中から多数の留学生を受け入れていることもあり(同時期にインド、イスラエル、エジプトから留学生がいらしていました)、私のように英語が苦手な医師が訪問してもゆっくり話して下さり、こちらが理解できるまで何度も説明して下さいました。カンファレンスも英語であり非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。ふと学生が持っていた授業の資料に日本の胃癌学会が出版している胃癌治療取り扱い規約が多く引用されているのを見て嬉しく思いました。

非常に満足度の高い Master class を終え、郊外の水原市に移動し、KINGCA WEEK 2022 に参加しました。韓国胃癌学会の主催でありながら日本以外からも色々な国からの演題登録があり様々なセッションに足を運びました。私の発表は二日目でした。同じセッションでは韓国のおそらく研修医～後期研修医相当と思われる若手の医師も発表しており非常に流暢な英語と座長と活発に議論する様子を目の当たりにし衝撃を受けましたがどうにか自身の発表をし、しどろもどろになりながらも座長からの質問にどうにか答えました。日本から参加した参加者向けに Award by Chairman という賞の授賞式もあり、英語でショートスピーチをするというイベントもありました。

Master class ならびに KINGCA WEEK 2022 に参加した感想はとても紙面だけでは語り尽くせませんが、何事も挑戦してみなければ道は開けないということを痛感しました。私個人としてはこれからのキャリアの上でも大きな転換点になったと考えております。来年度も KINGCA WEEK は開催されるようですし、Master class もあるようなので是非とも他の外科医にもお勧めしたいですし、私も来年も参加したいと考えているほどです。最後になりましたが、このような貴重な機会を頂き、助成をして頂いた日本胃癌学会の掛地吉弘理事長、国際委員会委員長の竹内裕也先生、ならびに前理事長の小寺泰弘先生に厚く御礼申し上げます。また、温かく迎えて頂いた Han-Kwang Yang 教授はじめ Seoul National University Hospital の皆様に心より感謝申し上げます。Seoul National University Hospital に一緒に訪問した浜松医大の坊岡英祐先生、渡航に際して協力いただきました KINGCA WEEK 2022 の事務局の皆様、ありがとうございました。渡航の準備をお手伝い頂いた国立がん研究センター中央病院の胃外科の秘書の皆様、研究指導と演題作成に尽力いただきました吉川先生ならびに胃外科のスタッフの皆様、ありがとうございました。



Master class および施設に訪れていた医師の方々と  
筆者は左端、隣が浜松医科大学の坊岡英祐先生でその隣が Han-Kwang Yang 教授  
イタリア、シンガポール、ドイツと世界中から医師が訪れます。



Han-Kwang Yang 教授より手術の point を丁寧に指導いただきました。  
筆者は右から二人目。向かって左手が Han-Kwang Yang 教授



Award by Chairman の授賞式での一枚  
筆者は右手



KINGCA WEEK 2022 での発表の一枚



Han-Kwang Yang 教授と浜松医科大学の坊岡英祐先生と教授室で一枚